

て、日本の本草学は薬理よりも名物学、物産学、博物学的傾向が強くなった。この傾向は蘭学、西洋博物学の影響を受けて著しく加速され、江戸末期において近代自然科学的な研究が蓄積されていく要因となった。

私自身も尾張に在住し、美濃を生活圏にしているという立場から、なぜ尾張と美濃の本草学が著しく近代博物学的な展開を示したかについては、以前から興味を持っていた。そうした視点からも、地域に縁の深い本草学者達の系譜と業績についてまとめられた本書は、待望の書であった。

著者は、昨年の十一月二十一日にも、内藤記念くすり博物館図書室に文献調査のために来館して、『医学館御薬園植附』『蘭方枢機』『和蘭局方』を閲覧された。特に『医学館御薬園植附』を熟覧する姿は印象深く記憶に新しい。このように各地へ直接に出向き、原資料を探索する地道な調査と研究の積み重ねを継続してまとめあげられた本書は、江戸期の本草学のみならず、西洋博物学、近代自然科学が日本で受容し発達した過程を知る上で、一読をお薦めしなければならない一冊である。

(野尻佳与子)

〔思文閣出版、京都市左京区田中閔田町二一七、電話〇七五一—七五一—一七八一、二〇〇三年四月、B五判、四〇九頁、本体七二〇〇円〕

酒井 シヅ 著

『絵で読む江戸の病と養生』

江戸日本の視覚文化は、T・スクリーチの『大江戸視覚革命』(一九九八年、作品社)にも見られるように、世界に誇るものがあつた。いっぽう医療の大衆化がはじまり、病気や健康に関する知識への欲求は今日と変わらない時代であつた。こうして病気や医療に関わる民衆のニーズに応えるには、視覚的メディアがもつとも有効であることはいうまでもない。出版文化の隆盛を背景に病気や医療に関わる錦絵などの絵解き刷り物が大量に出回つた。

本書は、昨年『病が語る日本史』(講談社)の好著を出された著者が、長年の研究生活の途次で出会ってこられた江戸時代に刊行された膨大な病気と医療に関わる視覚資料の中から、貴重で興味深いものを選びすぐり、一書にまとめられたものである。

著者はまず、幕末に刊行された『新撰病草紙』から江戸の病気の世界に誘い込む。この絵巻には馴染みの研究者も多いが、著者は取り上げた資料を、医学者と歴史家の二つの観察眼が一つになった眼差しで読み解いていく。

たとえば「蟻虫症の娘」について、「日本人は長い間寄生虫に苦しめられてきた。寄生虫が昔物語になったのは、戦後もかなりたつてからである。しかし、子供がかかる蟻虫症はなかなか根絶しにくい。蟻虫は雌が十ミリ前後、雄が二〜五ミ

りと小さい線虫で、盲腸に寄生しているが、夜中、雌が肛門の周辺に出てきて産卵する。そのとき、ひどいかゆみを引き起こす」と医学的説明をされ、つづいて、「この絵でも、熟睡中の子供が肛門のあたりをかゆがったのだらう、母親がそつとのぞくと白い細い虫がうごめいているので、拭き取っている」と絵解きしていく。このあたり絶妙の語り口で、著者ならではの独壇場である。

おなじようなことは、名高い錦絵の「房事養生鑑」「飲食養生鑑」についての説明にもみられる。前者について、「体内を郭の世界にたとえ、それぞれの臓器で人が働き、動かしている戯画から臓器の働きを教えている。漢方の五臓六腑説に従って、もつとも重要な心臓を郭の帳場にたとえる。そこに番頭と女将がすわる。心臓は肺とつながり、肺ではふいごで懸命に息を送っている様子を描いているが、これは江戸中期に出版された『解体新書』以来、日本に入った西洋の解剖知識である」というように、錦絵のもつ民衆教化的意味と医学史的な位置づけが短い文章で的確に要約されている。

「見立て」の好きな江戸人は病気や薬の「番付」をよく作っている。それを見ると当時人びとを苦しめていた病気やはやっていた薬が知られる。「病薬道戯鏡」には、西方が病気で、大関は疱瘡、関脇が五疳、小結が悪疾、前頭に中風、癩、逆上、黄疸、咳などが並んでいる。薬では大関は奇應丸、関脇が順気散、小結が救命丸、前頭に熊の胆、実母散などがつづく。前頭の下の方にある「小便近之助消渴」は糖尿病と

すれば、現代では関脇格ではないか、などと考えてみるのも一興である。

「麻疹番付」では、勸進元は「まじない」と「房事」で、東方は麻疹流行で当たりになる商売をあげ、大関は薬種屋、関脇が厩の別当、小結が医者、前頭には雇い人、駕籠屋などが並び、西方のはずれになる商売は、大関が女郎屋、関脇が芸者屋、小結が灸点屋、前頭には船宿、そば屋、寿司屋、湯屋、髪結い、盛り場などである。疫病が流行ると馬方や駕籠屋など交通機関が儲かることがわかり、また風俗営業や盛り場が商売上がったりになることは、昨今の新型肺炎の流行のさいと同じ社会現象といえる。

本書をひもどいていくと、江戸の人びとがいかに病気を暮らしの中に取り込み、病気を畏れつつも、ときに笑い、病気をあやし鎮めていた彼らの生命力と想像力の豊かさに驚かさないでいられない。

(立川 昭二)

(講談社、文京区音羽二―二十一、電話〇三―三九四三―一九三〇三(販売部)、二〇〇三年六月十二日、A五判、一七四頁、本体二〇〇〇円)